百蜀魂

中村俊定文庫
文庫 18
261
2

早稲田大学図書

中村俊定文庫

郭之儀詩 經机 曹北

月も傾く時分樣子 望峯

卯の花の垣ゆふ雪降て 芋矣

鶯鳴くなると泊まる 杜若

我しらぬ世界と鳴く 麦路

雪ふりて寒風吹く 望東

紅梅白梅ふくらむ 温故

春等ゆかけて突茶と云 雷利

城下りて東西南北 曹百

秋雨なれ中休者 柳玉

機の音止て寒う鳴て出て 七百

面もれ寒い淋しさ 吾妻

鶴なり有て人数の物 陸之

酒の肴の月を庵に 里峯

白毛物くれ強ひられて 芋矣

七調まで無き事 南畝

連歌師の羅漢出世をうけて

秋萩の門より高し　珍舎

降るとみるものはかなく　李紅

手傳みるもの　岸帥

焼鮮の縄も結びて秋の風　南畝

瓢も種よりあれ金仙　相甫

紅葉の本前路の月より高し　巴青

高野の義経の下戸　梅路

素也

卜部兼好

清士の恒のもとより牧中大　茂秋

徒花のあるもの宝の月晴て　南畝

下戸の宴遠し酒の外　芦矣

春白ひとの地宝ものの出来て春　東崇

出れば鐵の上ゆけば　陸之

云情より苦の宝白の義　盛名

山の樵夫を宝の春雲　佳玉

ほとゝぎすたゞの樹ばかりにて
雪も残しし白雪の波　春波
葉も無き路任の新と呼れて　杜若
呼めも辞しし第階なし　梅雨
雪解い間ちらちらさゝる　麦秋
大と奥くもかれし川毎　夜白
角力のたとえれば目を指合て　盛名
京のやうは出来ぬ所なれば　堅法

加丁

新くのうしこの牧中面能
たゞ雲い書る蕭の未深さ　新古
青春ちゝ春れ出れ　吐鋒
小さい屋をうる雲ふし　乙字
蹴鞠の柳もなくり無　梅玉
ちゝて新無ち新風　足古
目ち不新樹い生ちり面白　洞也
仇嘘ちうる書表の新　芋笑

童部しら川屋ふき　杉宮　祖符

夜の和歌よ遠ふんで磯　亀古

思想人惜しうしら浪　可濃

関よ蔦茅ふか風の波　左舟

新ふかの葉の風い音よ茅人童　菅薗

鶏鳴墨の月の氣ふく　畠敏

お撲しめ海いこまよ中うん　素也

岡のふよ表ふか口笛　桐南

おくふ郭公ふも種撞ふ　春波

笠の数白も出ふか筆　麦後

麻しさ抱籠ふうう笛ふて　菊二

海半曙しひの影よ風秋　倭玉

人鶏も市の付ふ蔦ふて明　芦葵

橋の上しら牛の網曳　亀古

新の月海面の去の中よ天て　倫可

一日糞ふ人蔦紫ふ氣　可濃

泉と二條よりさく杜宇
あのむくの葉の風　溪石
糸無い力の方へあるあて　里峯
川を銘しそい酒を吉也　岡也
陰めて雨さは秋も晴て　松比
先後ろ有雪物の沈む　彭里
拠屋ト居仏の月の仮あて　奥波
秋の雨と雨と遠ア　玲舎

素硯

雨毎て文の中ゆくる秋　杜菱
高系い下る我く高　樓　奥波
籠中る聖の帝句と字附て　東業
帯も書を結る　雪れ二段　房子
飯味も之度のおと鳴り　松比
旅寓ろ　白毛
子詩も里所の房吟ろ　茂秋
庭れ雲雲ト紙既　菅蕭

蘭路

[illegible]

乙鳥　素也

先船の泊まる歳は晩くして

塩の乗る頃ぬうらと　彭里

夕べも船の浦いつくる　仲巳

[illegible]　素祐

剤を出る毛の目のさ[illegible]　蘭石

松の古よ　[illegible]　普古

[illegible]

巴青

[illegible]　素清

[illegible]　杜莫

[illegible]　白毛

[illegible]　東里

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　里峯

芙蓉い新よあへむく時雨　普古

豆腐とうふまみ酒の肴　素道

橋二月夕月の影きさりて　彭里

年江よ有まん廣い堤下　麦後

回り角よ皆とかり竹て面白い　加丁

人よ思ふぬ細路の新　関丁

角打て掃き出る行て言の目　芦夕

長恋破れ初秋の月　麦後

埋きあれと人手ぬ　柳玉

花月と語て尺きる言葉　変林

出あけも泥湾の体と蛙ふ　白毛

附手よ板と手減しきり　李紅

雷う止て春雨を出て　菊一

京て律儀い純な津海　梅海

角目を拒て芋と洗ひ　加丁

什秋う野よ西に標に来　菊小

長い長い名前の部屋　彰里

萩の葉よりやく掛ける　夕由
吉井戸のあのさざ響く　呑湖
堀を鍬さ矢と取る　関石
長てうう稀ふとの中も歩行う　居子
塩玉沢へ羅いあふん　加丁
ふの日畳の芋よ拔うかく　殘夫
おくう来ふ蓑と着えふ　野坡

ほうとうと森も紀ふも旅の人　白岡
第い体む　和の舞　杜宮
牙ちうて居よ　蒙後の春有て　農席
百のあちり　の蔵いてく　蒙後
御入部の御ちて　高山道より　巴亭
蛙蓮池も　変よ　乗ふ　長秋
晨的も拔よのあけさ　盃の森　倫女
機敵稀よ　下沈いふ　夕由

帰るひよ雲くやゆ毋の留守　松比

ちるこの風し雖ども　白毛

乱くの窓うち寒へ咲して　温故

寒れ仮の夕度なるより　由歌

小夢ふいさと寒地の定らて　源江

明日の宴張と青る縁て　除舎

興自よ簾の寒と寒あけて　素道

雲ゆるる松むしの夢　芦夕

吐辞

雲むらひかくて杜宇

雲さらへ陰の逆笠　加丁

京ちくく高い主の舞うして　茂秋

ふひ出てる実物の根　う清

青の酒新い菓と言ふ也　活家

李春の多いをを数つる　有利

海くも自ら知るく山家去　東軍

去くの根ゆ遠ゆ居既星　左無

はかなくも物義よりなる婦人の歌　東里

蕾い菊の清香をもとめ　田園

振舞の袖を枝より解きて　仲子

簾の隙ゆしも春を待て居　種之

楊子の供い簫笙を指ゆ　杜蓑

百くし力の光る道も　菊二

三日も経て咲む蕾の白　仲七

筆あ菊いれて名と呼　関五

年の寄い森入るまくらの枕　珍舎

牧笛の響い庶吹の音　仲七

一日の温泉より着を脱て　松比

男の素ぶ人めるん素物　袁祭

子塚を寄くし海辺の梅　素淫

雲よ菊つく矢ふい名ら奇　倫古

夕月よ御石の寄具の寄ゆて　蕾古

花火の新とくく線風　巴青

貧窮を苦てうら帷や子規　居子

今朝冬生しる者の一八　素砧

る俤おうな窓ふかれ目ゐて　李紅

ふくしおれり豆うめ也　白國

古うの中うら菜畦出さ　倫古

湖面よ月をおてあるる　蒙塵

紅葉よ目の赤めけを時過　紅谷

裏門ちくい陰く寒の雨　蕉二

麦刈をあらうも天へ時雨　夕山

窓の蜘の蜘屋とうつ　東素

舟蔵よ遠蔵ちを風も　陸之

雨ふ赤い山戸ふ寒り　江京

蝶掃と社西へ第塚の　坐来

ふうう星くと素の朝日　春波

雨さ市よ掃ゆ掃を紛れも　荷堂

一男石ふ一所蓋　蕉呂

裏門ハ忘れも白しほうとおと　菊一

気の濃よ　紀氏　一八　江京

干てある傘後てうゝ傘よ来て　盛名

ちゝ来ちいひうあ合点　松比

嬰ゝの枝数ゝ秋の花う候　茂秋

橋の反あゝ天鵝を言自　東里

初汐よ蟹りうの赤出りの　佳玉

うゝ稼くの綿うゝ山　亀小

加賀笠も初雪を麦や郭公　変後

山白くゝと明ゆゝ室　亀小

菜漬ゝ旅のうゝゝ思いれて　牡莫

枕とゝ水ゝ至も賊ゝ　茂秋

小笹ゝの橋よ藤袋の張時し　浪江

町ていい紙よ　松氏　温故

ゝ道よ来殿と呼氏十七拍　素竜

頭の面ゝ踊ゝよゝゝ　同史

杜鵑啼百年の[illegible]

温故

戸の内にてよみ[illegible]つく　荷雪

雲物を初めぬ[illegible]入る　亀北

人元かなる重い障りて　朝古

後地を[illegible]程を道にて[illegible]　素[illegible]

出る[illegible]外に洗濯の足　祖符

仏[illegible]れるくさ[illegible]の目　白毛

雲[illegible]の[illegible]の垂[illegible]集　麦[illegible]

なくく[illegible]　素道

[illegible]屋も[illegible]の川　南畝

蝶[illegible]を[illegible]卧を[illegible]て　荷生

[illegible]の[illegible]屋下[illegible]　春波

連歌師い[illegible]を[illegible]の[illegible]　巴青

秋の[illegible]　土橋

高目と牛[illegible]　坐来

雲山[illegible]の沼林の[illegible]　李田

東堂

子規まゝ人あけてもまだゝ　盛名
團扇の風も毫に驚　温故
糸物の通しぬ道を冬住あば　漁江
見別ぬ月の懐かしく　味梓
まふ露てもみ露て崎も波の音　菅呂
年はより末ん路の出發り　仲也
孫の入稲みも二日三日の月　茂秋
膚の神香は幾聲か肴　白毛

俵砂に振入れと申部に　梅路
片山まゝり夕さらの約　江糸
未分八方は何さ幕に歸清て　原子
猪井山行列の侍　素也
何家へ行すそ名前ゝ續く笠　杜宮
馬一疋てもそれなり合　朝古
月しろに拵く出来る峯の影　陸之
積は気り浅みの来　茂統

射て來れ猫もてふしや時鳥　左竹
亭も袷の色も藤なし　素道
菫譜場に倚宗一首を咏して　亀小
夕めし前は菓子つくりけり　南利
返る時まく爽く地の面白さ　素硅
ちりのふすは國の紅葉　巴青
峯哉川月に拭はれて人の龍　妻波
苅田の行の鶯に飛紀　東里

珠数の玉おさへて時やかくしさす　亀小
寄子の綿を抜て夜寒　岸鳥
鞠場かれ呉服へ行かれけれ　妻妹
豆鶉かい行を楊繪　加丁
好かれて猫の縄めも綻けり　李紅
伯母の異見を無勢に請　杜英
名目は雲火もつゝと明かるく　麦浚
本貫に泊くすそ賣あり　洞也

杜鵑をきゝて梶とをきしをり　陸之

り樽の空し墨ゑ入　梅　温故

三味線の響古いわれを思ふく　荷雪

聴ゑをりよ筆の生の今ゝ　杜蓑

侍よ寄りと俗な市のもの　素道

俗ゆゑ形て秋う俗ゑん　龜水

名月よ先新茶をこゝろいて　陽江

京の陸ゑも麻の叶ゑ　浅夫

傾城も絹ゑ俗やかゝをを　吟家

陳よひくよ山やまを紅室　俳古

無井戸の紅稲よ寄せて　素弦

ゝをゆぬゝ寒ゑの機ゑ　盛石

雲ゝてゝ馬の自樽を石ゆり　吟舎

家ゝ鶏筆も変て赤ゝむ　仲巳

糸笠の筆ゝを月よ馬を寄て　杜蓑

いをゝゝんのゝ先新のゝ　蒼糸

杜谷

うくひすのこのてうらや首既　相甫

うきしゝ大ひらの遠分高井　左井

遠奈の手綱と絵よ筆ゆて　麦後

京の奴ゝ水ゝ咲ゝ出ゝ　居子

遠れ手借後のうくの玉格し　芋夕

空よ合ねのうくせう勢　坐来

三味線よ目も山ゝ浮出ゝ　伸士

初恋舟の、あへ乗也

中国の花よ年ふや鄙ゝ　春渚

生ゝ四絵と之義鑑高　百北

高桂よ四子日格と越ゝ野て　糸棠

蝶の書稿の様よ入れ　巴青

行燈と義の物ゝ合　柳路

余江の絵と高ゝ様て書　鈴古

一頃の目と金ゝ業ゝ付　貴蘭

扇の絵ゝて竜蓋破れ　夜白

蓮山うしろ[illegible]の雪のかしらおと　菖蒲

京無　京紀　給　加丁

合歓の木よ雪の滅りと後れぬ　杜菱

飯よ[illegible]ふ　後よりて　居子

能くかと田と出て足の雪成　彭里

るうう[illegible]旅人の笠　日岡

新月よりて戸の明るとあるん　杜角

湖もて　遠　[illegible]　杜岩

明りや屑屋うるかほうとと　朝古

橋よりて　面の矢し　東棠

引沙よ泉に兵清ふくめく　寒石

國の祝の[illegible]　彭里

峠返て牡丹二ツ玉　南舟

杉の蔭よ　柿の[illegible]　麦林

新月よ出て小[illegible]の書　岩奇

高ひも付く頭めより　吉湖

山寺は硯の海中部に　江雲

面は雲ふ海れる巣鳥の夜　屠月

鈴鹿をかりいの作る新蕎麦　蒼梁

つるつるくと　蕎麦　龜北

殿様の長は鈍の枝の先　素屋

春雨の肩の濡し面枝　青丹

青月の新い海れる雪　幾石

去の春は雲ふ春雨　素法

官船やロ和尺は出て面白　関石

夜の柳を　小袁　鈍自　芦笑

第うりおは書れるもの　乙多

酒屋の真ん酒奇ぬし　素也

詩化れしあらのゆうあ眼れる　吐辞

漕ぎは金ん横は海ふ　李紅

裏笠は曲寒いも光川て湯雪ふ　東里

山の夜しきの一ふけ　蕎二

子規声もよわらず入日ヶ那　里峯

音もの汀に急く右入　巴青

ゝ物とゝらす八百屋にうずみて　東里

川もの影と気はされし　桐雨

秋すゝき海老と時より痲て結　茂秋

覚まりて其の燃水指　荷重

菊の月影寂しくも松の奥　杜若

旅人の道の綾に露をし　東勝

影しらぬ人会をもはやかましき　芦笑

菜の種の音に実桜　望波

柴門を推さずも敲も戸の開て　加丁

赤い残花の春知りて有　菅庵

主持は親子の中に隔ひたれ　桐雨

家引音にはかり清影中り　白毛

秋是その姿さまよ月はあらぬ芽　夕由

公家の白衣も秋さびさむ　南畝

本合ハ山より流して下るなり芦夕

空ハ雲ちと道ハ外の夜　彭里

市うつの風より重の重の有て　左竹

繁と猫う掃部ちるなり　林舎

出地へも出と入さ者て伽を待　坐来

うつの八雲さよ点灯ゑ雲の　松比

京盆よ白雨ちと雨の自　荷重

の繁の絆いさ先てゆく秋　河水

本とふと下ふ嘆うち美人を　桐庸

蛍うけよ白雨を仏清水石分　拙白

風雅ようちたるうち於て　麦後

将棋と奏の中ふ双六　温故

雪繪うち本紙のひく蓋和　角古

夜張碁うち帰義雁人　素弦

盃うち鶴と張して書の自　佳丸

寓も秋ハ接別て軍　素流

石壇とうせへ仕廻へる時雨　白毛

涼しいおま天窓は猪く　佳玉

掃とるや来ていなさる男ぞて　只京

指ぬきうする小紙屋に　芦笑

神道と羽織の肩へ吹はれ　世待

さむれ縄手よきぬ山く　南畝

手毎入のとき紀州屋の月　亀利

新造の絆のすゑ出せむ　杜年

ひとしきり木の下雪や探り頭　漁江

豆腐の山もしき紀夜山　可濤

置とりたい秋と秋の明ま　備古

咲菊掃て付近く葉筆　夜白

手の波識まて菰の鵜おほへ　邑言

英の漆を何方へ身せう　柳玉

日の入を継くしと月の出て　佳之

明きる飛しる笠法てい　梅路

秋あらしを小田の稲や杜鵑　仲巳

[illegible]の風のすゑ板橋　杜谷

旅もすゑ笠の古ひかず日数へて　芦夕

藤ぬ味ふる律儀より里茅

上ぶるを敷の玉すゝ中二塔　筏史

洗濯すゝ柳茅屋すゝ　吟家

言月ゆ格と分てゆ者を麦林

歳秋傾く寒ほ〻童代　素也

京橋とおろそかもやる秋　南利

交山峯さ月の沸へて　菊二

一牧も尾房さんの立く　加丁

年うさ[illegible]い[illegible]ふ　菅蕭

笑ひ人の多ふよ芋も洗花を　葉路

洗ふ鳴と月ゆ人の付　房示

あふ音の中と独出る鶏籠　松比

蟬も屋も鳴ふ[illegible]ふ　素道

節録の宿より九度山に行
枝も茂りて秋と物さびし　坐来
驚かれも其郷も酒よりて　夕由
川とくの吉野の九山　温故
秦嘉を江に流れ　江奈
うらも頃の志なる青白　源江
流とのよ素麺ふる世の名　堅波
流のをさよ　ふい秋を　葉鳴

南畝

草司

松蔭より紙をはりはしめを
夢庵もうさる市の先なる　亀北
素麺ふ流れ酒より響く　春波
鶏ふい紙もあんうまり　淀江
堂主を西の筆よ吉義　曰園
師走の宮ハ風もつうし　東素
祖の自ふ奏の紙ヒワワれて　杜英
一般出しさ枕うを　つれ　盛名

就しきれる翁も蓋て鄭乙　茂秋

箕を跡かきまれ志音　杜菱

樹下の雲能を物と切須て　盛名

かとけこ常を高・高・高　葉路

ほりくと迎野を絵へ立森り　曽北

毛徳の新も　あを仮く　麦陵

国を吉　葉をくこ高ハ蓋ハ入　勢里

言の有葉の宮くれも　可懐

高野文庫